

# ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(4)

今野 浩 (中央大学)

## 7. 東京 1982

数理計画法の分野で、最も多くの研究者を擁する国は、発祥国のアメリカである。モントリオールに集まった約 800 人のうち、半数強がアメリカ人であったことから逆算すると、アメリカには 600 人から 1,000 人の研究者がいるものと推定される。

この分野の主要人物のほとんどが顔を揃えるシンポジウムに出てこないのは、家族の介護問題を抱える人や、過去 3 年の間に発表すべき研究成果を 1 つも出せなかった“透明人間”だけである。特別な事情がある人が 200 人、透明人間の中で研究を続けている人が 200 人いるものとする、全部で約 1,000 人になるわけだ。

アメリカの研究者は、論文を書いて書いて書きまくり、自分の存在をアピールしなくてはならない。有力教授の若手研究者へのアドバイスは、“keep you visible (透明人間にはなるな)”である。

透明人間にならないための条件は、(一流)ジャーナルに論文を発表することである。しかし論文を投稿しても、審査をパスしないこともある。一流ジャーナルの場合、採択率は 3 分の 1 以下である。拒絶されたら仕方がないので、あちこちで開催される研究集会で研究発表を行う。

「国際数理計画法シンポジウム」は、グレードの高い集会である。だからここで発表しておけば、透明人間にはならず済む。かくして、大勢の半透明人間がやってくるというわけである。

アメリカに次いで多くの研究者を擁するのは、ドイツ、オランダ、ハンガリーとイスラエルである。ハンガリーとイスラエルが多いのは、数理に強いユダヤ人が多く住んでいるからである。かつてはイギリスにも有力な研究者がいたが、(アメリカに引き抜かれたせいか) 70 年代に入ると大幅に地盤沈下した。

80 年代に入るまでの数理計画法は、欧米の(ユダヤ人中心の)ゲームだった。ところがここに、極東の

国日本が急浮上したのである。欧米圏に名を知られている研究者は 20 人程度に過ぎないが、RAMP シンポジウムに 150 人が集まったことからすると、200 人から 300 人の研究者がいるはずだ、と第 2 世代の役員諸氏は考えた。これはイギリス、ドイツ、オランダを合わせた数より多い。かくして、日本の国際的地位は急上昇した。

ボンで第 11 回国際数理計画法シンポジウムが開かれる 1982 年は、私にとって特別に重要な年だった。是が非でも 200 人以上の人を集めて、日本をピエロ扱いした人達を驚かせたかったのである。

集客の切り札となるのは、超大物を招待することである。ユニーク・ソリューションは、「数理計画法の父」である。

1914 年生まれのジョージ・ダンツィク教授は、この年の 11 月に 68 歳を迎えることになっていた。日本の標準からすれば、立派な高齢者である。

今年 70 歳になった私は、同年令の友人の中では元気な方だが、65 歳を超えるころから、海外出張は面倒だと思えるようになった。時差の解消に、若い頃の 2 倍の時間がかかるからである。

ところがアメリカの高令研究者は、同世代の日本人研究者よりずっと“いきがいい”。実際ダンツィク教授は、依然として大西洋を股にかけて飛び回っていた。

もしこの人を招くことができれば、200 人の参加者を見込むことができる。東京は遠いと言うアメリカ人は多いが、サンフランシスコからであれば、直行便がある東京の方が、テルアビブに行くより楽なのではないか。それに東京の方が、ずっと安全で快適だ。

ダメでもともとだと考えた私は、ダンツィク教授に手紙を書いた。折返し届いた返事には、“喜んで行こう。前回は時間がなくて行けなかった、札幌などにも行ってみたいので、滞在期間は 2 週間くらいが望ましい”と書かれていた。

万歳三唱だが、2 週間となるとお金がかかるし、接待も大変だ。サンフランシスコ—東京(成田)のビジ

ネス・クラス料金は30万。一流ホテル2週間で約40万。謝礼が30万、その他あれこれでもう20万。最低でも120万円を工面しなくてはならない。夫人同伴となれば、150万以上かかる！

経済学者や経営学者グループが、アメリカからノーベル賞級の大家、例えばポール・サミュエルソン教授やマイケル・ポーター教授を呼ぶときには、日経新聞や経団連といったスポンサーがつく。飛行機はファーストクラス、謝礼は講演1回100万、ホテルは帝国ホテルが当たり前である。

しかし経済学者でも経営学者でもないダンツィク教授には、日経新聞も経団連もお金を出してくれない。円高と第2次石油ショックの影響で、企業は経費削減中である。

何か所か掛け持ちすればどうにかなるだろうが、年齢を考えれば、20年前のときのようなハード・スケジュールを組むことはできない。

国際シンポジウムを日本で開催するために、「数理計画法の父」を呼ぶのだから、通常は5,000円の参加費を1万円に値上げして、100人分の参加費を回せばいいではないかという意見もあった。しかし、値上げして参加者が減ったら元も子もない。

たかが5,000円で影響が出るのか、とお尋ねの向きには、「それが出るのですね」とお答えしよう。研究費が乏しい若手研究者にとって、5,000円は大金なのです。

私の手元には、1982年10月13日から27日に到る、ダンツィク教授訪日の、1時間刻みのスケジュール表が残っている。それを見ると、東京7泊、札幌2泊、博多1泊、京都2泊、筑波1泊、そしてこの間に10回の講演が組まれている。

一見すると、ヘビーなスケジュールのように見えるが、常時律儀なエンジニアが随行しているし、講演地では下へも置かぬおもてなしである。また10回の講演も、その内容は2種類だけだから、それほど負担にはならなかったはずだ。

この旅行のハイライトは、20日午前のRAMPシンポジウムの特別講演と、福岡で開催された情報処理学会での招待講演である。

RAMPでの講演には、予想を大幅に上回る230人の聴衆が「虎ノ門パストラル」に詰めかけ、補助椅子を出すほどの盛況だった。その夜の懇親会も、150人がダンツィク教授を囲んで盛り上がった。

ダンツィク教授は、1950年代に一度来日されたこ

とがあるが、そのときこの人の顔を見たのは、50代後半から上の人だけである。私より若い人の中で、“ナマ・ダンツィク”を見ているのは、モントリオール・シンポジウムに参加した30人くらいだろう。

講演内容は、以前に聞いたことがある「線形計画法の回想」に少々手を加えたものだが、若い人にとっては初めて聞く面白い話だったようだ。

講演内容はともかく、夕方の懇親会で、ダンツィク教授と直接言葉を交わす機会が提供されたことは、大学院レベルの若手研究者に、大きなインパクトを与えた。

私は学生時代に、マクシマム・プリシンプルで有名なレフ・ポントリャーギン博士と、ダイナミック・プログラミングの創始者である、リチャード・ベルマン教授の話の聞きに行ったことがある。

講演の内容は分からなくても、偉い先生の顔を見ておくだけでもプラスになるという、森口繁一教授の言葉を信じて見に行ったのが、40年以上たった今でも、そのときのことは良く覚えている。

世界的業績を上げた大先生には、そういう人だけが持っているオーラがあるのだ。その頃は、学生の分際で大教授と話をすることなど思いもよらなかったが、今回のシンポジウムでは、若者たちが講演会で顔を見て声を聞き、懇親会では、「How do you do? My name is T. K.」だけであっても、直接言葉を交わすことができたのである。

後世、「20世紀のラグランジュ」と呼ばれることになる、ダンツィク教授の激励を受けた若手研究者は、フォン・ノイマンの激励を受けたダンツィク教授同様、その言葉を一生忘れないはずだ。

秋の日本旅行を楽しまれた教授は、RAMP委員会が贈呈した、「団竹讓治」なる文字を刻んだ水牛の印鑑を気に入って下さり、その後何年か私への手紙には、サインとともにこの印鑑が押されていた。

RAMPシンポジウムの大成功は、ダンツィク教授の口から第1世代、第2世代のリーダーたちに伝えられ、この時点で日本は、アメリカに次ぐ世界のナンバーツーと目されるようになった。

伊理・刀根教授をはじめ、2ダースに及ぶ研究者が、海外の一流ジャーナルに優れた論文を書きまくる時代の幕が開いたのである。

続く83、84年のシンポジウムには、P. ウォルフ、M. バリンスキー、R. コトル、E. ジョンソン、N. メギットらの有力研究者を招いたおかげで、150人以上

が集まってくれた。そして私はこの成功によって、88年大会は必ず日本にやってくる、という確信を持ったのである。

## 8. スタンフォード 1984

インディアナで4カ月を過ごして、日本に戻ったその日に起こったのが、ソ連のアフガニスタン侵攻である。そしてこの事件によって、私とアメリカの関係と同様、アメリカとソ連の蜜月時代が終わり、冷戦が戻ってきた。

アメリカ社会がますます右傾化する中、80年秋の大統領選で、現職のカーターに圧勝したリーガン改めレーガン大統領は、大軍拡に乗り出した。その目玉は「SDI 構想」、すなわち核弾頭を装着したソ連のミサイルが発射された瞬間に、人工衛星からこれを確認して、軌道に乗る前にレーザー光線で撃ち落とそうという、「スターウォーズ計画」である。

この計画の実現には、膨大なコストがかかる。したがって、本来なら増税しなければならないところ、レーガンは富裕層優遇のための大減税を実施した。減税すれば人々の意欲が高まるから、かえって税収が増えるという当てにならない話である。

計算機科学者によれば、この構想を実現するためには、6,500万ステップに及ぶプログラムを組まなくてはならないという。それまでに書かれた人類史上最大のプログラムより、1ケタ上の規模である。しかしこのような超大型プログラムは、いつも正しく動く保証はない。

プログラムというものは、どれほど注意深く作っても、あちこちにバグが残るものである。このバグのせいで誤作動を起こせば、即全面核戦争となって地球は吹き飛ぶ。ところが米国民は、スターウォーズ将軍に、圧倒的支持を与えているのである。

70年代に、私が頻繁にアメリカを訪れたのは、“50%アメリカ人”の帰巣本能がなせる業だった。また毎年1回スタンフォードを訪れたのは、ダンツィク教授に会いたかったからである。

80年代に入ってから、アメリカに行かなくなったのは、ティーチング・雑務マシーンとして、忙しく働いていたこともさることながら、“レーガンのアメリカ”が嫌いだったからだ。

そして84年にレーガンが再選されるに及んで、私の足はますますアメリカから遠のいた。85年8月には、「国際数理計画法シンポジウム」に参加するため、

ボストンに行かなくてはならないが、このときだけは眼を瞑るしかない。

こう思っていたところ、84年の秋になって、バリンスキー教授に代わって国際数理計画法学会の会長に就任した、アレックス・オルデン・シカゴ大学教授から手紙が届いた。

“88年の第13回シンポジウムの件で、直接会って話したいことがあるので、アメリカに来る予定があったら教えていただけないか。シカゴに寄ってもらえれば助かるが、場合によっては私の方から出向いてもいい”。

たまたまこの年の11月に、スタンフォード大学で大きなイベントが企画されていた。数理計画法の父の生誕70周年と、OR学科発足20周年を祝う会である。

ダンツィク教授は、この年の6月に定年で大学を去る。だからこのパーティーには、教授から博士号をもらった弟子たちは、特別の事情がない限り出席するだろう。

それにもかかわらず出席を見送ったのは、翌年8月になれば、ダンツィク教授に会えると思ったからである。しかし、オルデン教授の手紙で気が変わった。

20周年記念パーティーは、200人以上が集まる盛大なものだった。しかしリーバーマン副学長のきらびやかな祝辞を耳にしながらか、私の心は微妙に揺れていた。

その理由は、OR学科の教授9人のうち、8人までが創立時と同じ顔ぶれだったことである。私が留学した時点での教授陣の平均年齢は、40を超えたばかりだった。ところが16年後のいま、学科全体が16年分歳を取っていた。研究水準の低下に比例して、学生の水準も低下した。

このとき既にスタンフォードは、全米ナンバーワンの地位を、コーネル大学に譲り渡していたのである。第2世代の代表であるジョージ・ネムハウザー教授や、第3世代のチャンピオンであるマイケル・トッド教授をはじめ、ロバート・ブランドら若手のエースを集めたコーネルは、1968年当時のスタンフォードに匹敵する陣容を誇っていた。

20周年記念パーティーの直後に開かれた、ダンツィク教授の満70歳を祝う晩餐会には、アルバート・タッカー、ケネス・アロー、ラルフ・ゴモリー、エゴン・バラスらの大家をはじめ、ダンツィク・スクールの要人のほとんどすべてが顔をそろえた。

70歳を超えても、当分の間教授ポストにとどまることになったダンツィク教授は、終始上機嫌だった。

性や年齢で人間を差別すべきではないという“affirmative action”の波に押されて、年齢による強制定年制が廃止され、(研究費を獲得できる限り)いつまでも教授の地位をキープできることになったのである。

100人近い参加者の中で、ダンツイク教授の弟子は、バークレー時代の5人を含めても、15人には届かなかった。配られた資料には、30人以上の名前が挙がっていたが、半分も集まらなかったのはなぜか。

兄弟子のイラン・アドラーは、これらの人はすでに“透明人間”になってしまったからだと言っていた。たとえ「数理計画法の父」から学位をもらっても、論文生産競争に負けた人は、3年でイエロー・カード、6年でレッド・カードをもらって、研究者コミュニティから退場を命じられてしまったのだ。

オルデン会長との会合に出席したのは、ダンツイク教授とタッカー・スクールの重鎮であるマーティン・ビール博士、そしてダンツイク教授の一番弟子であるリチャード・コトル教授である。最初に口を開いたのは、オルデン教授である。

「ここにいるメンバーは、88年のシンポジウムを日本で開催してもらいたいと考えているが、引き受けていただけるだろうか」

「それは大変有難いことです。われわれは1980年以来、シンポジウム開催に向けて準備を行ってきました。理事会で日本開催を決めていただければ、御期待に添うよう頑張るつもりです」。こう答えると、コトル教授が口を挟んだ。

「旅費・滞在費が高いという理由で、東京開催に反対する理事もいるが、この点で何らかの便宜を図ってもらえるだろうか」

「今の段階では、お約束できません。積極的に募金活動を行うつもりですが、このところ日本では不況が続いていますので、どれだけ集められるか分からないのです」

「しかし何らかの提案がないと、理事会の了承を得るのは難しいかもしれない」とコトル教授。するとオルデン会長が助け船を出してくれた。

「努力すると言ってくれているのだから、今はそれで十分ではないだろうか。約束してもらいたいことは、同じ建物もしくは移動が容易な建物の中に、50人程度は収容できる15の会場と、400人以上入る特別講

演会場を用意すること。招待講演者の人選には、慎重を期してほしいこと。それから、宿泊施設は豪華なものではなくていいので、会場へのアクセスがいいところ、できれば大学の学生寮が利用できることと有難い」

MITの不始末が、トラウマになっているのだ。はじめの2つにはきっちり対応するとして、3つ目は難しいリクエストだ。MITでは、1週間100ドル程度で学生寮に泊めてもらえることになっていたが、アメリカの大学では夏休み中は学生寮は空になるし、管理が行き届いているので、若い研究者にとってはこれで十分だが、日本は状況がちがう。

「会場の件は了解しました。宿泊施設もなるべく安く近いところを確保しますが、学生寮を使うのは非現実的です。そもそも東京の大学には、寮というものはほとんどないのです」

日本社会で最も薄汚れた宿泊施設が、大学の学生寮であることは、日本人なら誰でも知っている。それに日本の学生寮は、夏の間もカラにならない。

「招待講演は、MITのカーマーカーのことを言っておられるのでしょうか、人選は国際プログラム委員会と相談した上で、あのようなことが起こらないよう、十分気をつけたいと思います」

「分かった。それだけ約束してもらえば十分だ。理事会の了承を取り付けるよう、われわれも努力するので、よろしく願いしたい」

ビール博士とコトル教授をこの場に同席させたのは、第2世代を納得させるためには、これがベストだと考えたためだろう。

オルデン教授から、伊理教授と私あてに手紙が届いたのは、翌1985年の3月末である。そこには、“理事会は満場一致で、シンポジウム助言委員会に対して、1988年の国際シンポジウムの日本開催を提言した。ついでには至急シンポジウムの開催場所、日程および組織委員会の委員長名を知らせていただきたい。正式決定は、8月に開催される理事会を待たなくてはならないが、ほぼ間違いなくこの線で決まるだろう”と書かれていた。

3月中に理事会が東京を推薦したということは、モントリオール大会のときも、ボン・グループが3月中にこれと同じ手紙を受け取っていた証拠になる。

私が疑ったとおり、ウォルフ会長は、ボン開催がほぼ確定したところで私に声をかけたのだ。